

【 会員投稿 】

両親の認知症在宅介護 始末記

篠崎 辰夫

過日、満100歳を迎えた母が亡くなり、ようやく両親の介護が終わった。思えば長くつらい介護だったが、最後は二人とも家で静かに看取ることが出来てなによりだった。

両親の介護を通じて、多くの教訓を得た。介護のインフラは昔に比べ良くなったとはいえ、まだまだ医療や介護保険制度の将来は不安がいっぱい。行政にばかり頼ってはいられない。「在宅寝たきり介護」となると、家族の肉体的精神的負担は筆舌に尽くし難い。認知症介護で一番大変なのは家族だ。まずは自らが呆けないこと、寝たきりにならないこと、そして残された家族が困らないよう、さまざまな「もしもの時の備え」を今のうちから整理し残しておくことが大事と、改めて痛感した。

父は20年ほど前、当時の痴呆症介護で大変苦勞した。まだ介護保険もなく、施設も治療方法も確立されていない時代。不可思議な病に対する手探りの壮絶な在宅介護が5年ほど続いた。

その介護記録を単行本にまとめ自費出版したところ、新聞や雑誌にも取り上げられ、ある自治体や介護団体から講演依頼が飛び込んできたりして、思わぬ体験をさせてもらった。それほど当時の痴呆症とその介護は未知の世界だった。

母の介護は8年ほど前から。家の前の道路で転倒し大腿骨骨折で入院。手術して奇跡的に回復したが、入院の環境変化で認知症が始まった。父ほどではないが、昼夜の徘徊が目が離せなくなった。ただ、この20年で介護のインフラは様変わりし、デイサービス施設や医療など介護保険制度のサービスを最大限利用させてもらい大変助かった。

100歳まで元気に毎日デイサービスに通っていたが、年齢には勝てなかったようだ。ソファから立とうとして転んで足腰を打ち、動けなくなってしまった。もう骨がぼろぼろ状態ということで、医者からも見放されてしまった。そしてその日から壮絶な寝たきり介護がスタートした。

担当のケアマネにお願いし、まもなく高機能付き介護ベッドが運び込まれ、介護ヘルパー、訪問看護師、往診の医師、訪問入浴と、体制が整った。

当然これだけでは足りない。妻はおむつ交換、私は三度の食事介助とローテーションに加わった。介護は土曜も日曜もない。毎日スタッフが入れ替わり出入りするため、家も長時間空けられない。今まで以上に自由な時間がなくなった。

最大の難関はおむつ交換。1日最低3～4回替えねばならない。意外と力が要る。妻はすぐ腰を痛めてしまった。ヘルパーは手慣れたもの、便の出が悪いと指を入れてほじくり出してくれる。家中臭気がただよう……。

そんな介護も3カ月が過ぎたころ、訪問入浴のあとしばらくして、風邪をひいたのか、痰がから

んだ咳をしだした。看護師に吸引機で痰を吸い出してもらい、その後楽そうに眠ったので安心していましたが、夜中に見たらぐったりしていた。眠ったままの自然で安らかな最期だった。

葬儀も済ませほっとする間もなく、煩わしい役所や年金、郵便局、銀行などの手続きが続く。せめて役所に提出した死亡届が年金停止に連動して欲しいもの。

そして今頭を痛めているのが「タンスの肥やし」。タンスの中に着物などがいっぱい詰まっている。形見分けにすすめても誰も見向きもしない。どう処分したらいいのか……。

両親を見送り、これらを我が身に置き換えてみると……なんとも心細い。残された家族の困っている様子が目に浮かぶ。まずは自らが呆けないよう、健康長寿に心がけると共に、今のうちから「もしもの時」に備え、情報や物をまとめて整理しておこうと思う。早速市販の「エンディングノート」を購入、ネットから「エンディングノート書き方講座」も見つけた。「もしもの備え」で、安心・快適な老後を！

<追記>

先日あるテレビの認知症の番組で、パソコンが認知症予防に大変効果的と報じていた。お年寄りが集まって「パソコン」を前になごやかに教え合っている事例も紹介されていた。

そういえば我が「菱の実会パソコンサークル」もそんな集まりです。パソコンを前にワイワイガヤガヤ興じています。みんなパソコンより口の方が上手い。そんなサークルに参加してみませんか。パソコンは、呆けないための「い〜いクスリ」です。

菱の実会ホームページに、「エンディングノートの書き方講座」を転載しました。参考にして頂ければ幸いです。